



TITLE:

膀胱後部脂肪肉腫の1例

AUTHOR(S):

棚瀬, 和弥; 守山, 典宏; 村中, 幸二

CITATION:

棚瀬, 和弥 ...[et al]. 膀胱後部脂肪肉腫の1例. 泌尿器科紀要 1998, 44(2): 105-107

ISSUE DATE:

1998-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/116123>

RIGHT:

膀胱後部脂肪肉腫の1例

市立長浜病院泌尿器科 (部長: 村中幸二)
棚瀬 和弥, 守山 典宏, 村中 幸二

RETROVESICAL LIPOSARCOMA: A CASE REPORT

Kazuya TANASE, Norihiro MORIYAMA and Koji MURANAKA
From the Department of Urology, Nagahama City Hospital

A case of retrovesical liposarcoma is reported. The patient was a 41-year-old man who complained of left scrotal pain and of hip discomfort. Digital rectal examination revealed a hen's egg-sized mass with an elastic hard consistency at the left side of the normal prostate. Pelvic CT and MRI showed a heterogeneous tumor in the retrovesical region. Transperineal biopsy revealed liposarcoma. Pelvic exenteration, colostomy and ileal conduit were performed. The resected weight was 1,680 grams, and the histopathological diagnosis was myxoid type of liposarcoma, grade II. Postoperatively, a metastatic lesion to vertebrae thoracicae I developed causing radiculoneuropathy of the left superior limb. Spot radiation (50 Gy) was administered to the lesion, but there was no response. Currently, the patient is being treated with combination chemotherapy consisting of dacarbazine, vincristine, adriamycin, and cyclophosphamide. Cases of retrovesical liposarcomas reported in Japan are reviewed and discussed.

(Acta Urol. Jpn. 44: 105-107, 1998)

Key words: Retrovesical tumor, Liposarcoma

緒 言

膀胱後部腫瘍は、膀胱後部の軟部組織を原発とする稀な疾患であるが、特に膀胱後部の脂肪肉腫の報告は少なく、本邦ではこれまでに4例の報告をみるのみである。今回、われわれは膀胱後部より発生し、手術療法施行後に骨転移が出現した脂肪肉腫の1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者: 41歳, 男性

主訴: 左陰囊部痛, 臀部不快感

家族歴・既往歴: 特記すべきことなし

現病歴: 1996年8月頃より左陰囊痛, 臀部不快感が出現し徐々に増悪してきたため同年9月当科受診。直腸診にて前立腺の左側に腫瘤を触れ, CTにて骨盤内に巨大腫瘤を認めたため, 精査・加療目的に同年10月25日当科入院となった。

入院時現症: 身長 173 cm, 体重 75 kg, 体格栄養状態良好。胸腹部理学所見に異常を認めず, 表在リンパ節も触知しなかった。外性器に異常なし。直腸診にて正常前立腺の左側に弾性のある鶏卵大の腫瘤を触れた。

入院時検査所見: 末梢血液像, 血液・生化学検査, 血清電解質に異常所見なく, PSA, γ -Sm, AFP, CEA, CA19-9等の腫瘍マーカーもすべて正常範囲内



Fig. 1. Pelvic enhanced CT scan. A heterogeneous tumor occupied the retrovesical lesion.

であった。

画像所見: DIPにて上部尿路に異常なく, CTで膀胱と直腸の間に内部不均一でやや low density な腫瘤を認め, 不均一に造影された (Fig. 1)。MRIでも T1, T2 強調像ともに low~high まで, さまざまな intensity をもつ腫瘤を膀胱後部に認めた (Fig. 2)。注腸造影では, 直腸~S状結腸は前方より圧排されていた。

臨床経過: 膀胱鏡を施行したところ, 膀胱粘膜は保たれていたが, 後方から圧迫されて膨隆した所見であった。膀胱後部の間質性腫瘍を疑い経会陰的に生検を行ったところ, liposarcoma の病理診断を得た。1996年11月25日, 全身麻酔下で骨盤内臓全摘除術, 回腸導管 人工肛門造設術を行った。

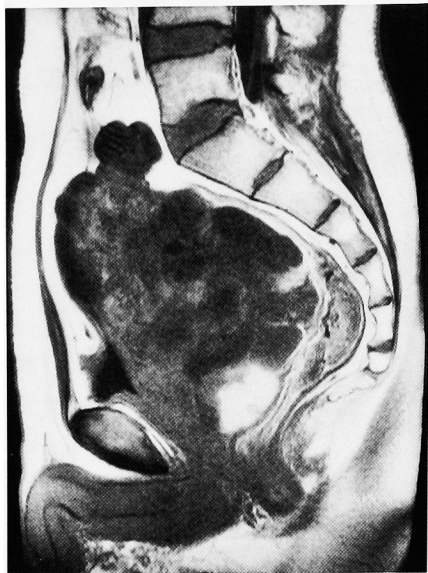


Fig. 2. T1-weighted MRI revealed a large mass between bladder and rectum.

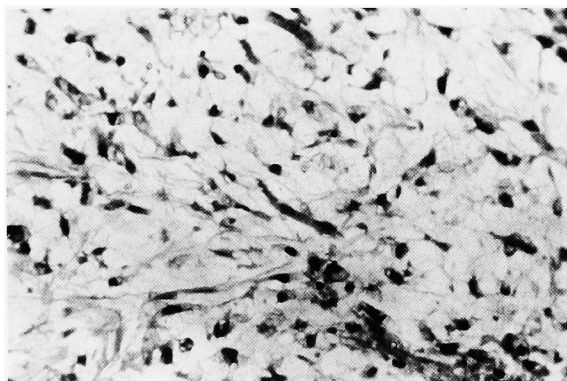


Fig. 3. Microscopic findings revealed liposarcoma, myxoid type, grade II (H-E stain $\times 100$).

手術所見：腫瘍は骨盤内いっばいの大きさで一部は腹腔内に突出しており，膀胱，直腸とは癒着していたが，肉眼的に骨盤壁への浸潤は認めなかった。直腸，膀胱，前立腺は腫瘍とともに一塊に摘出した。明らかなリンパ節腫大は認めなかった。摘出総重量は 1,680 g であった。

病理組織所見：myxoid type liposarcoma grade II であり，膀胱，直腸，前立腺への浸潤はいずれも認められなかった (Fig. 3)。

術後経過：術後，局所の症状は消失したが，第 1 胸椎への転移巣が出現し，左上肢のしびれ等，神経症状を呈してきたため，第 1 胸椎転移巣に対し，50 Gy の放射線照射を行ったが無効であり，逆に進行が認められた。現在 cyvadic 療法のレジメンに従って，化学療法を施行中である。

考 察

膀胱後部腫瘍とは，骨盤内の特定臓器とは無関係に

膀胱後部の軟部組織を原発とする腫瘍の総称であり，Young¹⁾ が retrovesical sarcoma として発表して以来，本邦でも散見されている。小田ら²⁾は，本邦における膀胱後部腫瘍135例の組織別頻度をまとめており，その後の報告例と自験例を加えると膀胱後部腫瘍は合計164例になる。自験例は本邦における膀胱後部脂肪肉腫としては，松木ら³⁾の症例に次ぐ5例目の報告であると思われる。これは，悪性の膀胱後部腫瘍のうちわずか5.6%の発生割合であった。脂肪肉腫は後腹膜悪性腫瘍全体の中でも15.1%の割合⁴⁾で最も多く発生しており，膀胱後部は発生しにくい傾向があると思われる。

膀胱後部腫瘍の主症状は，腫瘍の増大による隣接臓器への圧迫症状，すなわち排尿困難や残尿感，排便異常，骨盤部違和感等を示すことが多く，発見されたときにはすでにかなり大きくなっていることが多い。

脂肪肉腫の病理組織分類は5型にわかれており，松木らの後腹膜脂肪肉腫165例の集計³⁾では well-differentiated type が38.8%で最も多く myxoid type 24.8%，pleomorphic type 20%，mixed type 13.3%，round cell type 0.3%の順となっている。

脂肪肉腫の治療は，他の悪性腫瘍と同様，外科的な完全摘除が第1選択である。脂肪肉腫は肉眼的には被膜に覆われているが，これは偽被膜であり，被膜外浸潤傾向が強いため腫瘍を摘出しても局所再発が多いと報告されている⁵⁾。そのため周囲の健常組織を含めた広範な切除が望まれる。自験例も骨盤内臓全摘術によって周囲組織も含めた十分な切除を行った結果，現在のところ局所再発を認めていない。

脂肪肉腫に対する術後補助化学療法として種々の方法が試みられており，いまだ確立されたものはないが，Yap らは CYVADIC 療法の有効性を報告しており⁶⁾，また Celick らも，より積極的に化学療法を行うべきと述べている⁷⁾。自験例も，CYVADIC 療法のレジメンを基に現在全身化学療法を施行中である。

本邦において報告された膀胱後部脂肪肉腫をまとめると (Table 1)^{3,8-10)}，全例が壮年期の男性に発生している。手術療法に加えて，術前あるいは術後に全例で化学療法が行われている。転移がみられた症例は自験例のみであった。

予後に関して Enzinger らは，well-differentiated type と myxoid type は pleomorphic type と round cell type の約4倍5年生存率が良いと報告している¹¹⁾。well differentiated type と myxoid type のみに放射線療法が有効との報告があり^{12,13)}，この2つの type の予後が良い理由の1つと推測される。自験例も myxoid type であり，その放射線感受性を期待して胸椎への転移巣に対して 50 Gy の放射線照射を

Table 1. Retrovesical liposarcoma cases reported in Japan

症例	報告者	年齢	性別	主 訴	治療	転移
1	棚橋ら	58	男	発熱 残尿感	手術 化学療法 放射線照射	なし
2	鍋倉ら	46	男	排尿時痛	術前動注+TAE 膀胱部分切除 放射線照射	なし
3	酒井ら	50	男	排尿困難 排便困難	腫瘍摘出 化学療法	なし
4	松木ら	65	男	頻尿 排便困難	術前化学療法 骨盤内臓全摘 化学療法	なし
5	自験例	41	男	臀部不快感 左陰囊部痛	骨盤内臓全摘 放射線照射 化学療法	あり

行ったが無効であり、逆に進行が認められた。転移巣に対する治療は、報告も少なく予後も不良と考えられるため、今後さらなる検討が必要と思われた。

結 語

41歳男性に発生した膀胱後部脂肪肉腫を経験した。膀胱後部より発生した脂肪肉腫としては本邦で5例目と思われた。

骨盤内臓全摘術を行った後、第1胸椎に転移巣が出現し、放射線療法を施行したが無効であった。現在全身化学療法を施行中である。

本文の要旨は、第375回日本泌尿器科学会北陸地方会(1997年2月、金沢)に於いて発表した。

文 献

- 1) Young HH and Davis DM: Young's Practice of Urology, vol. 1: W.B. Saunders Philadelphia, 1926
- 2) 小田昌良, 客野官治, 宇佐美道之, ほか: 膀胱後部線維腫の1例. 臨泌 **46**: 601-603, 1992
- 3) 松木孝和, 常 義政, 田中啓幹, ほか: 膀胱後部脂肪肉腫の1例. 西日泌尿 **58**: 954-957, 1996
- 4) 直江道夫, 内田博仁, 檜垣昌夫, ほか: 巨大後腹膜脂肪肉腫の1例. 西日泌尿 **57**: 1305-1309,

1995

- 5) Enterline HT: Liposarcoma, a clinical and pathological study of 53 cases. Cancer **12**: 912-924, 1959
- 6) Boh-Seng Yap: Cyclophosphamide, Vincristine, Adriamycin, and DTIC (CYVADIC) combination chemotherapy for the treatment of advanced sarcoma. Cancer Treat Res **64**: 93-98, 1980
- 7) Celic C: Liposarcoma: prognosis and management. J Surg Oncol **14**: 245-249, 1980
- 8) 棚橋豊子, 堤 啓: 急速に増大せる膀胱後部腫瘍 (Liposarcoma) の1例. 日泌尿会誌 **74**: 664, 1983
- 9) 鍋倉康文, 寺崎 博, 下村貴文, ほか: 膀胱後部脂肪肉腫の1例. 西日泌尿 **54**: 1899-1902, 1992
- 10) 酒井善之, 関 聡, 村石 修: 膀胱後脂肪肉腫の1例. 臨泌 **48**: 334-337, 1994
- 11) Enzinger FM and Winslow DJ: Liposarcoma a study of 103 cases. Virchows Arch A Pathol Anat Histopathol **335**: 367-388, 1962
- 12) Edland RW: Liposarcoma. Am J Roentgenol **103**: 778-791, 1968
- 13) Binder SC: Retroperitoneal liposarcoma. Ann Surg **5**: 257-261, 1978

(Received on July 2, 1997)
(Accepted on October 14, 1997)